

筆者が高校生まですごした高知で確実にオオムラサキと出会えるのは大豊郡梶が森だが、メスを捕らえただけできれいなオスとの真の出会いは日野春が初めて。日野春はまさにオオムラサキの多産が有名で、新宿からの中央線電車利用で1975年、1976年と二度訪れている。初めて訪れる土地でオオムラサキに出会えそうな場所をかぎ分けることはさして難しいことではなく、京都市左京区静市でも初めての訪問時に降り立った叡山電車のホームから周辺景色を見渡し、クヌギの木がある雑木林にねらいを定めて入ると案の定樹液があってオオムラサキを見つけることができる。



July 11, 1971 京都市静市市原 オオムラサキ

山梨県日野春は、自動車道路両側に広がるモモやスモモの果樹園周辺に格好の雑木林が密度濃く点在していて、その林の中に適度の小道があちこちに走っていることから、オオムラサキが好む樹液の出ている木を探し当てるのは容易な地域である。東京大学薬学部への国内留学2年目の7月7日、東京での住居を5年間住んだ国分寺市恋ヶ窪から都内練馬区高野台に移して、妻が運転免許を取り「お得のカラーラ」300番での家族ドライブで三度目の日野春をめざす。車がとめられる適度な木陰をみつけたあとは、林の中に見える小さな歩道へと入り込む。容易に樹液の出ているクヌギが何箇所か見付き、その位置に高低の違いはあれ、ほとんどすべてのケースで複数頭のオオムラサキが樹液を吸っている。息子の浩成(6才)、娘の純子(5才)にも交代でネットを持たせ、オオムラサキを捕獲する感激をいとも簡単に体験してもらえた。オオムラサキは翅表斑紋が複雑に配置されているせいか、添付写真をみくらべてみるだけでも細かくみれば各個体間で微妙に異なる斑紋をもつことが分かる。僻地教育に力を注いだ筆者の父が校長として赴任し



July 7, 1977 山梨日野春 オオムラサキ



July 7, 1977 山梨日野春 オオムラサキ



July 16, 1978 山梨日野春 オオムラサキ

た高知吾北村清水で、父：英雄と母：琵琶子がそれぞれ捕獲してくれた個体のうち、母採集の個体は後翅中室の白紋がはっきりと二分され、その下に並ぶ4個の黄色斑点も下から2番目が弦月型を呈するなどの変化が面白い。

オオムラサキの地理的変異とか個体変異に関しては、栗田貞多男著「オオムラサキー日本の里山と国蝶の生活史ー」(信濃毎日新聞社、2007)に詳しい解説がある。1990年代に入って、北海道夕張郡栗山町滝ノ下に生息する上記黄色小紋が3個ともに三日月型となる特異な一群についての調査が進められ、1996年、藤岡知夫氏らによって新亜種 *ssp.kuriyamaensis* として日本蝶類学会誌 Butterflies に記載登録された(1996、No.13,p.18-29)。



July 3, 1971 高知吾北村清水 leg.Hideo Shimazaki



July 18, 1970 高知吾北村清水 leg.Biwako Shimazaki

た高知吾北村清水で、父：英雄と母：琵琶子がそれぞれ捕獲してくれた個体のうち、母採集の個体は後翅中室の白紋がはっきりと二分され、その下に並ぶ4個の黄色斑点も下から2番目が弦月型を呈するなどの変化が面白い。

2016年の7月、加古川の里山・ギフチョウ・ネットの久保弘幸さんから兵庫県佐用町産の初令幼虫と卵を分けていただいて飼育したなかで、2017年5月11日に最初に蛹化した個体が14日後の夕方に羽化兆候を示しており、朝起きてからビデオ記録を取ろうと準備を整えて5月26日の早朝に目覚めたら、想定よりも早い時刻にオスが羽化していて、しかも蛹殻につかまっているはずの羽化個体がないという状況。あたりを調べると、脱出後に蛹殻につかまる力が弱かったのか完全に翅が伸びる前に落下していて、気づいた時点では右翅は伸びているのに左翅が前後翅ともにしわくちゃのまま固化してしまっていた。悔やまれることに、明るい場所にもって行って観察できたその翅表の輝きが、まさに最近有名になったモルフォムラサキと呼ばれる見事なライトブルー。何とか伸び切った右翅だけでも標本化しておこうとアルバム形式の標本を作成してみたが、通常のおオムラサキの輝きと違う青みを帯びた美しい輝きを感じられる標本に仕上がっている。その他の飼育羽化個体にはこのようなブルータイプはでていなく、その発生比率は1/30ときわめて低い。これまで佐用町にこのようなタイプが産するという報告はなく、貴重な記録だと思える。



May 26, 2017 佐用町産